

8)伝染性紅斑

(定義) ヒトパルボウイルスB19の感染による紅斑を主症状とする発疹性疾患である。

令和6年の伝染性紅斑は、小児科定点医療機関から78人(累積定点当たり報告数1.56)の報告があり、令和5年(64人)より14人多かった。年間で第27週(0.18)が最高値であり、県内での大きな流行は認められなかった(図2-8-1)。累積定点当たり報告数をみると全国(10.28)は本県(1.56)の約6.6倍で、国はりんご病に警戒するよう12月に注意喚起を行った(図2-8-2)。保健所別では、鹿児島市、鹿屋、始良の順に(図2-8-3)、年齢別では、1歳(20.5%)、5歳(19.2%)、4歳(12.8%)の順に多かった(図2-8-4)。

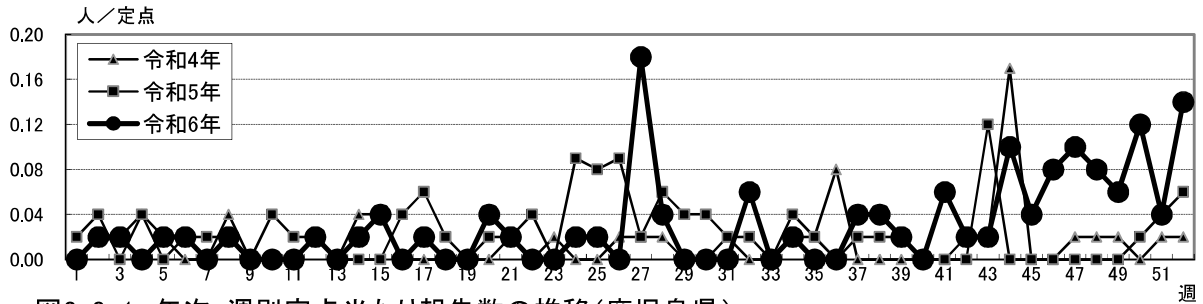


図2-8-1 年次・週別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

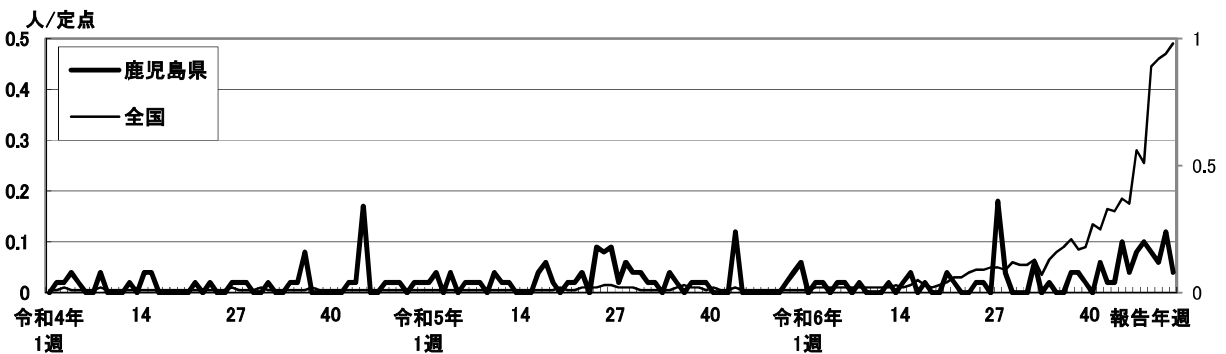


図2-8-2 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

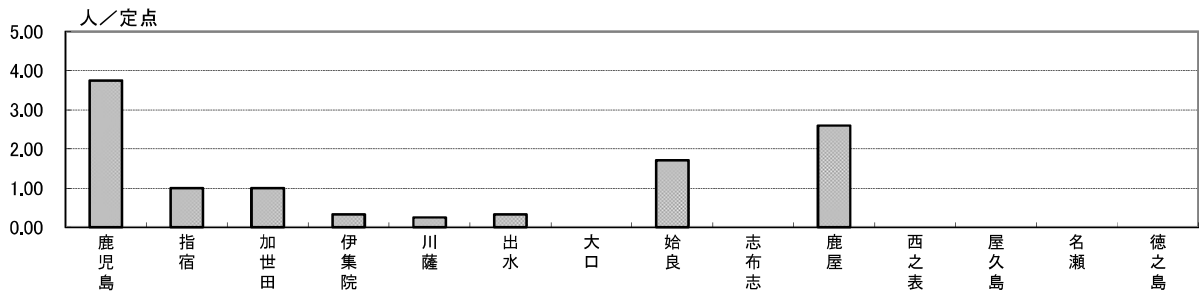


図2-8-3 定点当たり報告数(令和6年保健所別)

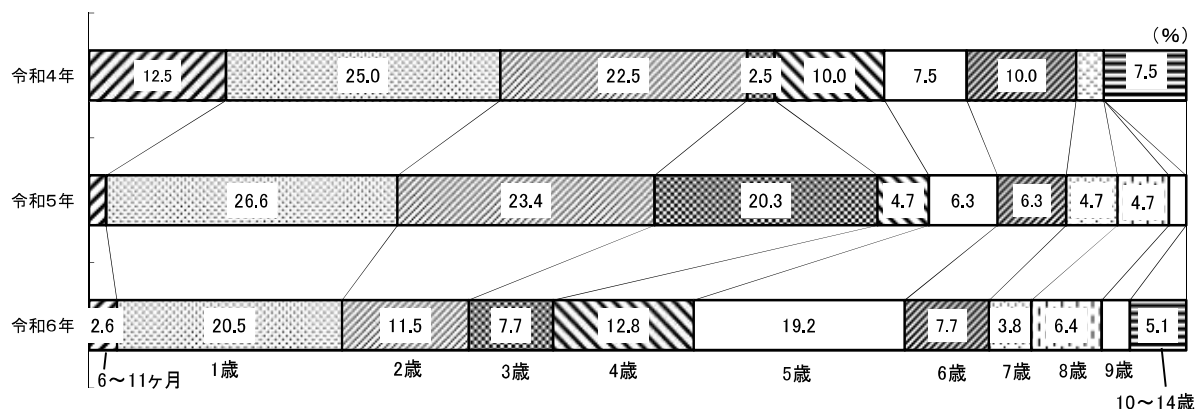


図2-8-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

9)突発性発しん

(定義) 乳幼児がヒトヘルペスウイルス6, 7型の感染による突然の高熱と解熱前後の発疹を来す疾患である。

令和6年の突発性発しんは、小児科定点医療機関から874人(累積定点当たり報告数17.48)の報告があり、令和5年(836人)より38人多かった。年間では第37週・第49週(それぞれ0.53)が最高値であった(図2-9-1)。累積定点当たり報告数をみると本県(17.48)は全国(13.18)の約1.3倍であった(図2-9-2)。保健所別では、鹿児島市、鹿屋、始良の順に多く(図2-9-3)、年齢別では、1歳(57.8%)、6～11ヵ月(24.0%)、2歳(12.4%)の順で、1歳以下が全体の約83%を占めた(図2-9-4)。

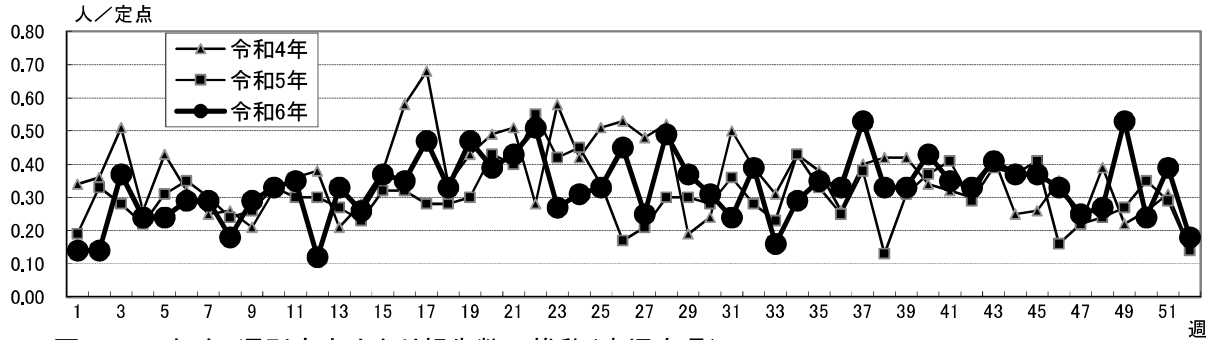


図2-9-1 年次・週別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

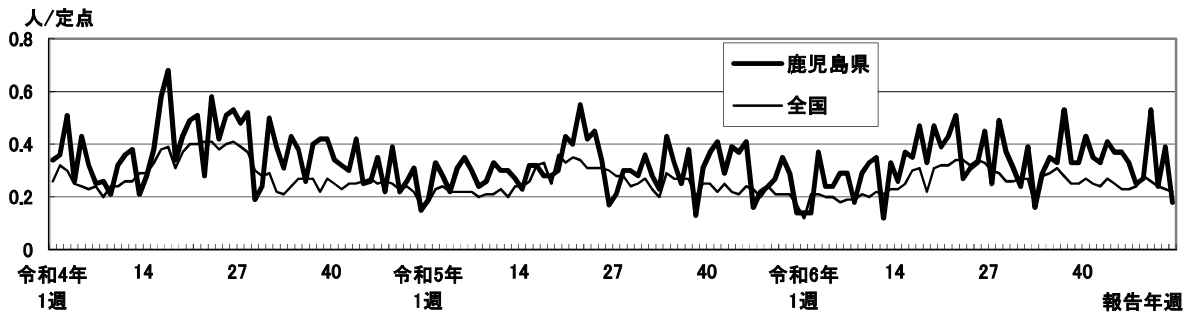


図2-9-2 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

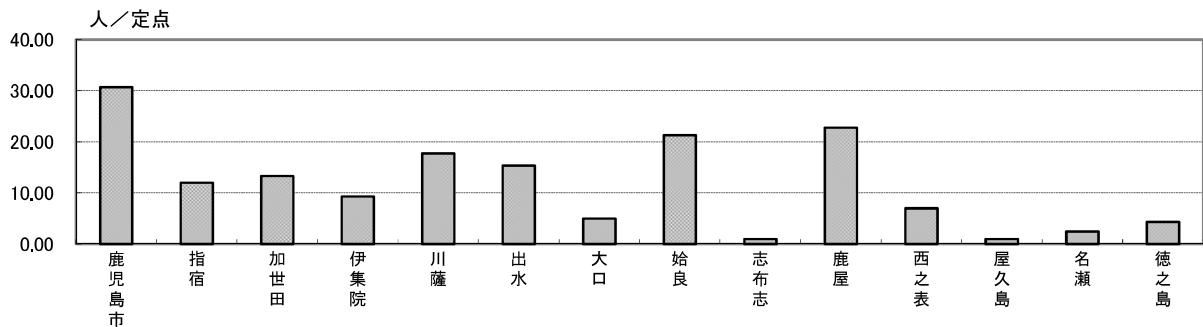


図2-9-3 定点当たり報告数(令和6年保健所別)

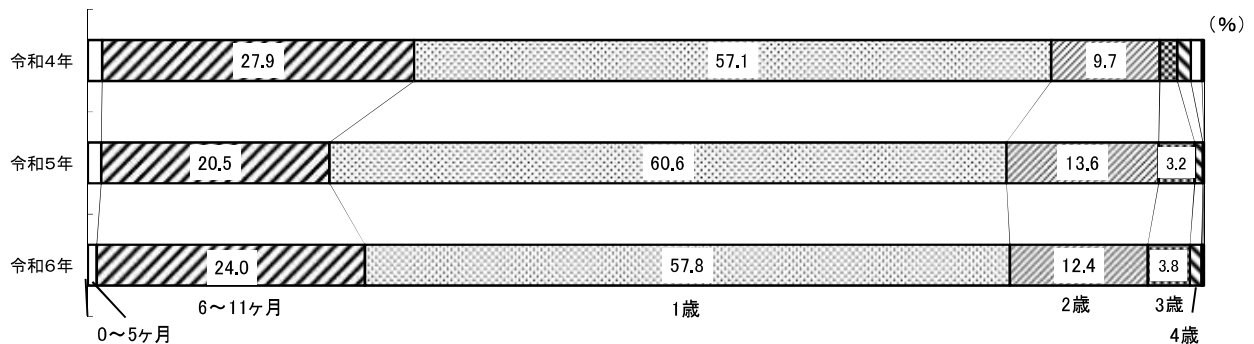


図2-9-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

10)ヘルパンギーナ

(定義) 主にコクサッキーウイルスA群による口咽部に特有の小水疱と発熱を主症状とする夏かぜの一種である。多くは、コクサッキーウイルスA群2～8, 10, 12型, まれにその他のエンテロウイルスも病原として分離されることがある。

令和6年のヘルパンギーナは、小児科定点医療機関から1,902人(累積定点当たり報告数38.04)の報告があり、令和5年(5,329人)より3,427人少なかった。年間で第32週(2.86)が最高値であり、大きな流行は認められなかった(図2-10-1)。保健所別では、鹿屋、鹿児島市、始良の順に(図2-10-3)、年齢別では1歳(26.7%)、2歳(18.9%)、3歳(12.5%)の順に多く、3歳以下の報告数は全体の約68%を占めた(図2-10-4)。

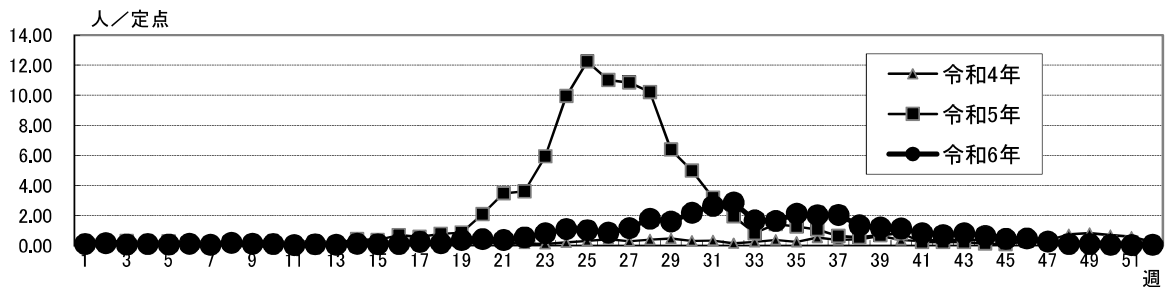


図2-10-1 年次・週別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

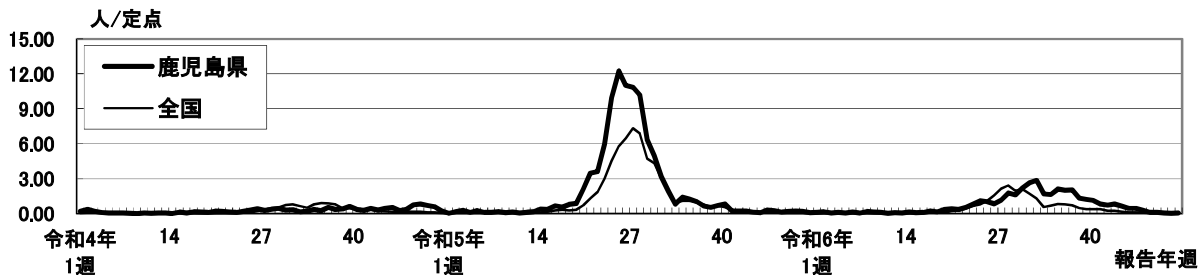


図2-10-2 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

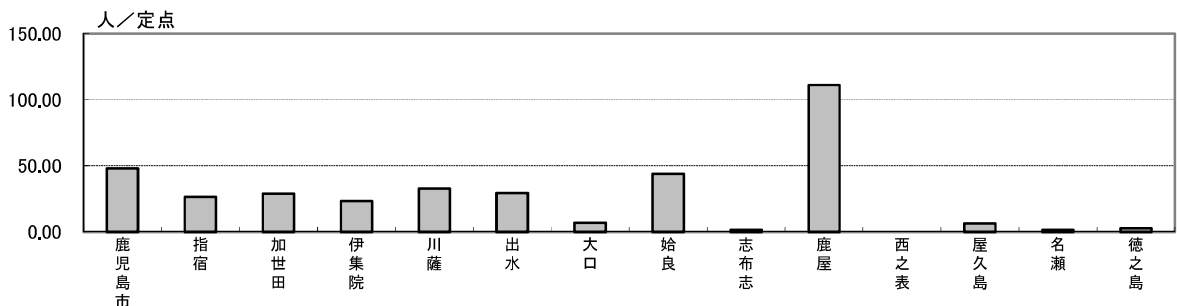


図2-10-3 定点別報告数(令和6年保健所別)

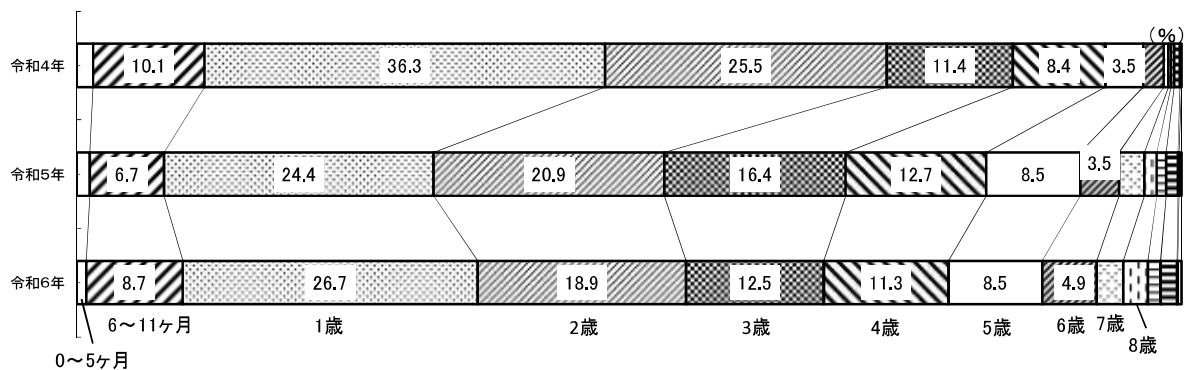


図2-10-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

11)流行性耳下腺炎

(定義) ムンプスウイルス感染により耳下腺が腫脹する感染症である。

令和6年の流行性耳下腺炎は、小児科定点医療機関から107人(累積定点当たり報告数2.14)の報告があり、令和5年(165人)より58人少なかった(図2-11-1)。年間では第3週(0.14)が最高値であり、大きな流行は認められなかった(図2-11-2)。保健所別では、始良、鹿児島市、指宿の順に(図2-11-3)、年齢別では、4歳(19.6%)、5歳(16.8%)、6歳(15.0%)の順に多かった(図2-11-4)。

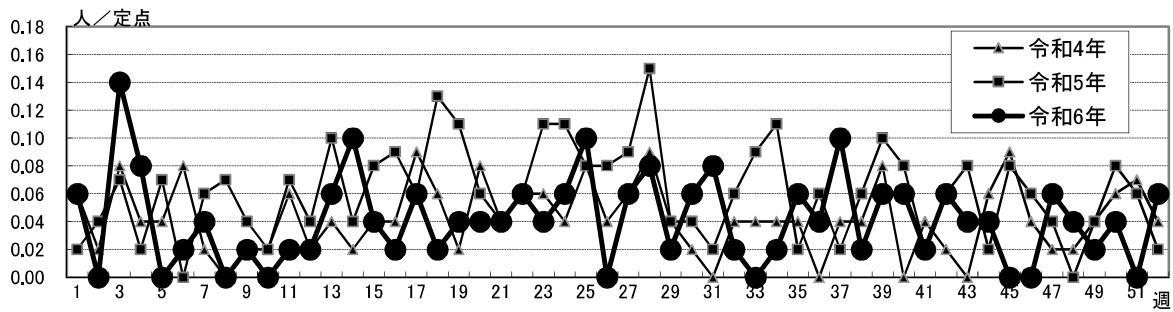


図2-11-1 年次・週別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

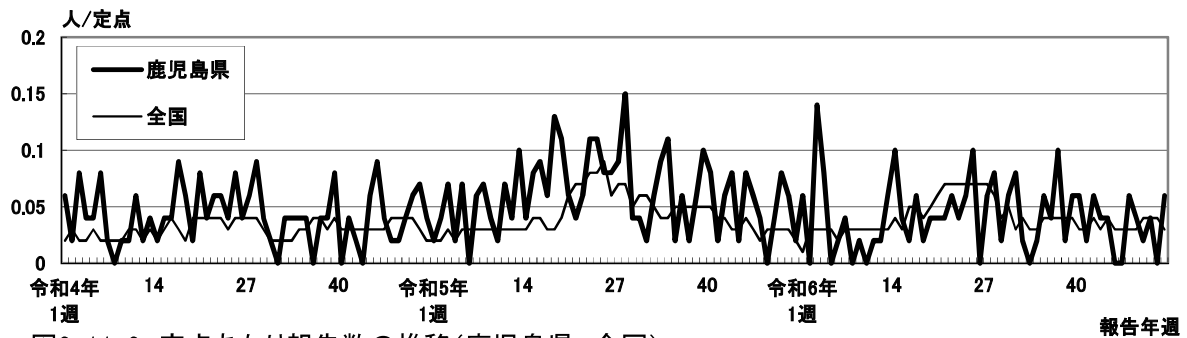


図2-11-2 定点あたり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

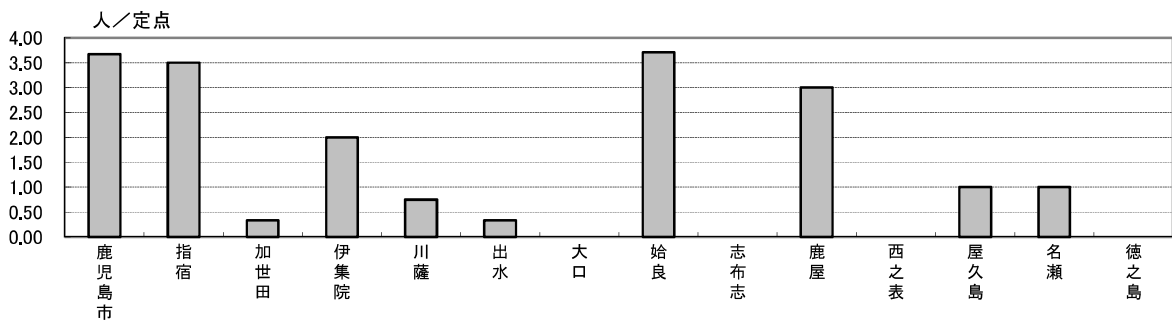


図2-11-3 定点当たり報告数(令和6年保健所別)

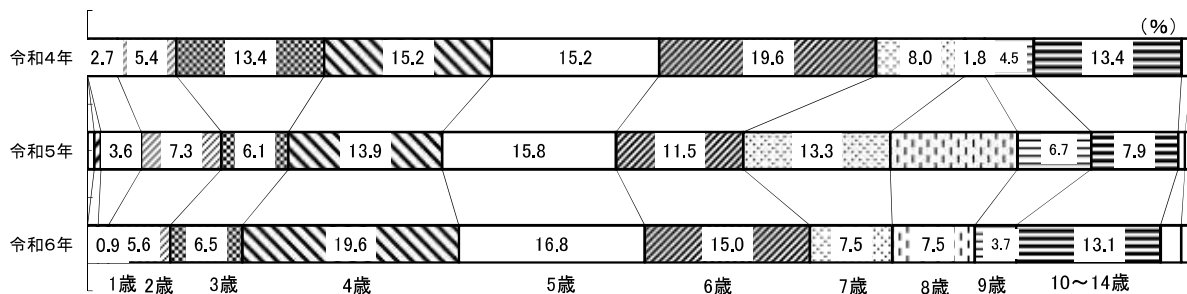


図2-11-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

12)RSウイルス感染症

(定義) RSウイルス(respiratory syncytial virus)による急性呼吸器感染症である。乳児期の発症が多く、特徴的な病像は細気管支炎、肺炎である。

令和6年のRSウイルス感染症は、小児科定点医療機関から3,601人(累積定点当たり報告数72.02)の報告があり、令和5年(4,307人)より706人少なかった(図2-12-1)。年間では第28週(5.63)をピークに流行がみられた。累積定点当たり報告数をみると本県(72.02)は全国(39.22)の約1.8倍であった(図2-12-2)。保健所別では、鹿児島市、始良、出水の順に多く(図2-12-3)、年齢別では、1歳(36.4%)、6～11ヶ月(17.1%)、2歳(17.0%)の順に多く、1歳以下の報告数が全体の約67%を占めた(図2-12-4)。

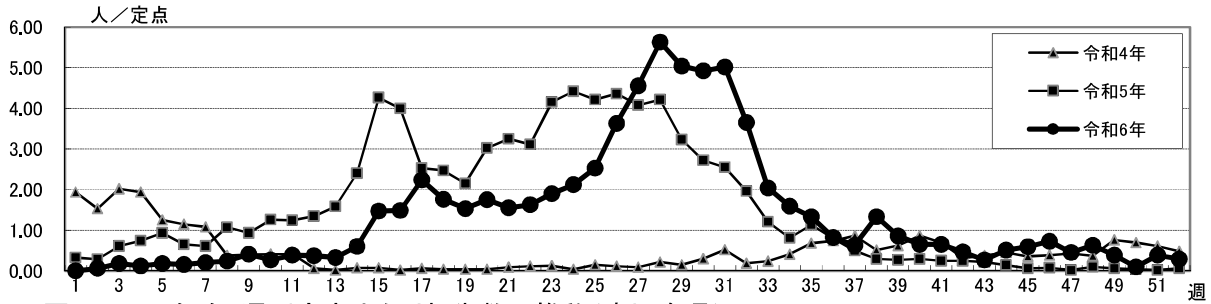


図2-12-1 年次・週別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

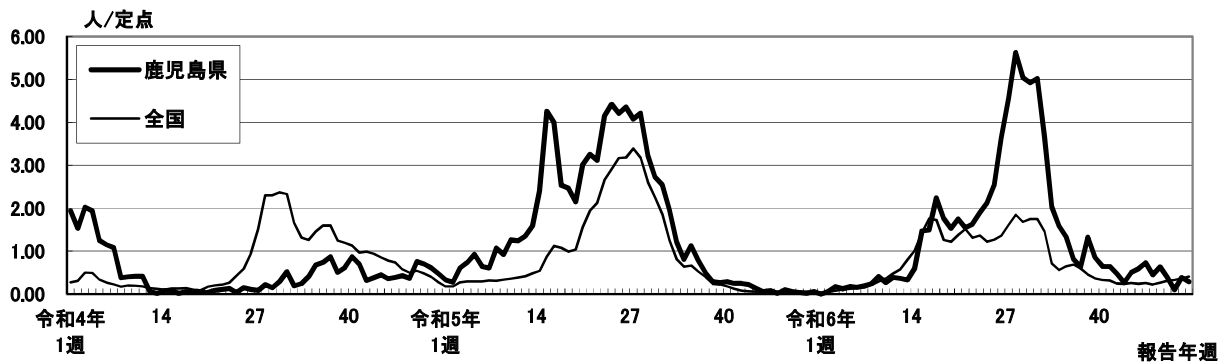


図2-12-2 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

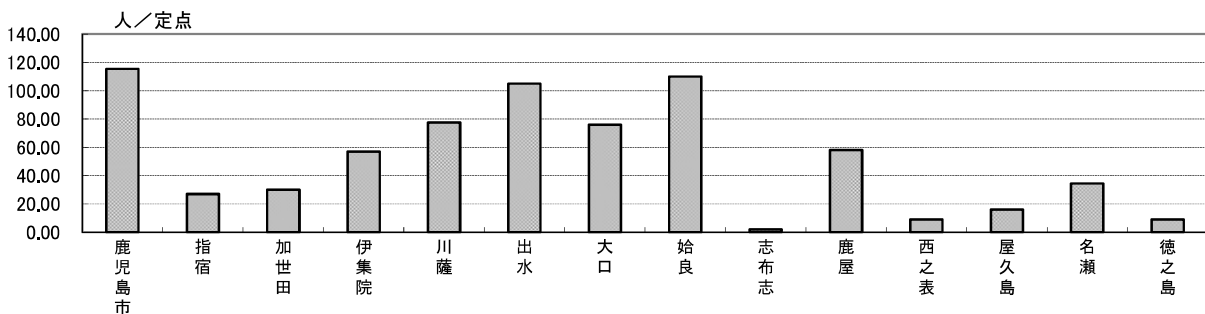


図2-12-3 定点当たり報告数(令和5年保健所別)

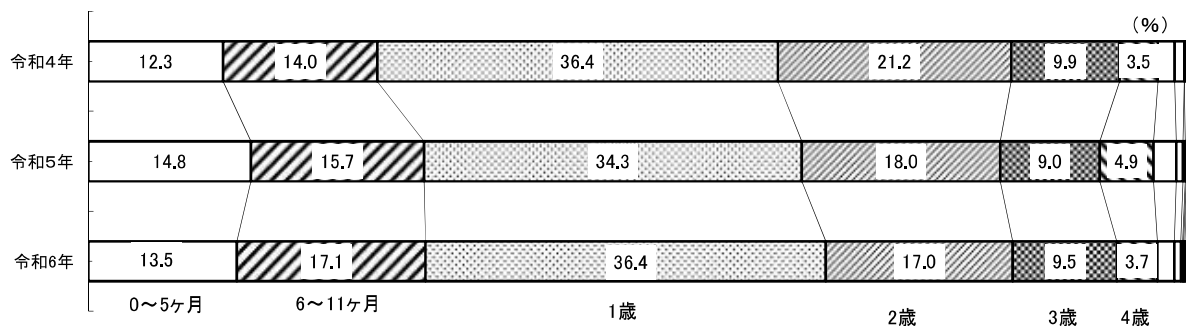


図2-12-4 全国・鹿児島一定点当たり週別発生状況(鹿児島県)